

2007年度 図工・美術部会 研究計画

研究主題 よさを感じ合い、確かな表現を実感できる授業の創造
～表現活動を高める鑑賞活動の工夫～

研究目的

1. 研究の経過

2005年度までの10年間の研究では、題材の持つ「ねらい」や「基礎・基本」を明確にし、「題材で育てたい力」を研究の中心に据え、題材の開発や見直しを通し「楽しさを味わわせ、意欲を引き出す」手だてを探り、指導過程や評価のあり方を工夫するなかで「表現の喜びを開く」授業づくりや「子どもが主体的に題材と関わる」造形活動目指した実践の検証が進められてきた。

第39～40次の研究では、「感受性豊かな子どもを育てる授業づくり」をテーマに、美術作品の見方の具体化を中心とした鑑賞の手だてを研究内容とし、成果として鑑賞活動を通しての教師や子ども同士の価値観の共有、互いの感動や思いを伝え合う活動の大切さが確認できた。

これまでの研究経過をふまえ、題材のねらいや基礎・基本の明確化を図りつつ表現活動と鑑賞活動が相互に関わり合う造形活動づくりを目指すべく、第41～42次の研究では「よさを感じ合い、確かな表現を実感できる授業の創造」という研究主題を設定した。研究の一年目にあたる昨年度は、二次集会や各市町村で行われた授業研究・日常実践レポート及び児童生徒作品の交流を通して研究仮説に対する検証の取り組みが進められた。また、理論・実技研修会は、造形活動の中で引き出される力の大切さや造形力を高めるための指導過程上の工夫などを学ぶ場となった。本年度は研究の二年目にあたる。

2. 主題設定の理由

現行学習指導要領のもと、「生きる力」を育むことを目指し、自ら学び考える力の育成と基礎・基本的な内容の確実な定着を図り、子どもの個性を生かすことを目指してきた教育の方向性は、今、「学力低下論」のもと大きく舵を切りつつある。子どもたちが自らの手で未来を切り開いていくための「生きる力」を培うためには、知識や理解は不可欠なものである。しかし、人間相互の関わりの中で、様々な価値観との出会いや経験を通じての学びこそが、豊かな人間性・知性・文化を創造する力の土壌であるといっても過言ではない。

美術教育の固有の目的は、造形的な感覚や判断力、表現力を養うことであるが、その効果や機能（情操教育）はそのベースとなる造形教育が適切に行われることではじめて可能になる。「上手にできた」ではなく、「自分にしかない表現ができた」と子どもが感じ、自分にとっての新しい意味や価値を作り出し、伝えることが「確かな表現」であると考えられる。これは、創造活動のできる図工美術という教科だからこそ実感させることができる。そのためにも、教師が題材の中に価値を見出し、「子どもに育てたい力」を明確に押さえた授業づくりを目指すことが大切である。

子どもの作品の持つ価値は、必ずしも成功した表現の成果とは限らない。制作過程においてのつまづきや躊躇、失敗や落胆など、子どもが葛藤や試行錯誤した軌跡も作品に焼き付けられていく。作品に込められた子どもの想いを教師が見取り、自己評価や相互評価によって作品から様々なことを読み取ろうとする活動が、作品の持つ価値の高まりに結びつくのである。さらに、芸術作品などの鑑賞では、子ども自身の素直な印象を大切に、教師が作品や作者について語ったり様々な見方の観点を示したりすることで、新しい発見・気付き、疑問などが生まれてくる。そのような手だてが、作品からの様々なメッセージを感じ取る子どもたちの目や心のアンテナを高く、数多く、太くしていく。このようにして、多様な価値観を手に入れる入り口を

広げることが鑑賞の学習でつきたい力なのである。

これまでの研究の成果を土台にしながら、鑑賞と表現とがより結びついた造形活動を目指した「よさを感じ合い、確かな表現を実感できる授業の創造」という研究主題を設定した。

3. 研究仮説

基礎・基本にもとづき、題材で育てたい力を明確にし、表現したいことの発見を大切に、表現意欲に結びつく鑑賞活動の手だてを工夫することで、「確かな表現」ができる。

研究内容

研究主題	研究内容
よさを感じ合い、確かな表現を実感できる授業の創造	1. 発想を生かし生き生きと活動する「確かな表現」に結びつく指導過程の工夫はどうあるべきか
	2. 鑑賞活動と表現活動との関わりをどのように持たせたか

1. 発想を生かし生き生きと活動する「確かな表現」に結びつく指導過程のあり方はどうあるべきか

第40次までの研究である「楽しく」「意欲的・主体的に」「表現に喜びのある」の上に立ち、題材の中で子どものどんな力を育てるのか、どんな基礎・基本を身につけさせていくのかに焦点を当てて進めていきたい。まずは、子どもの発達段階をしっかりと押さえた題材の選定をしていくことが重要である。次に、題材のねらいを踏まえ、素材を選び、完成までの過程で子どもが生き生きと造形活動を進めていける指導過程上の工夫が必要である。造形活動は、「～のように表したい」という発想を持つところから始まる。しかし、実際に活動を始めようとする、何を描こうか発想が出てこなかったり具体化したりできない、失敗することが怖い、思うような形や色にできないなどの創作のハードルがある。それらを乗り越えさせるため、教師は子ども一人一人と対話することで安心感を与えていく。子どもが自分の思いに自信を持ち、作品に込めたいこうとする気持ちを持てる表現活動を展開したい。

表現活動を進める中では、今までの体験で身につけたことが生かされること、形の取り方や色の作り方を理解することが表現の具体的手だての一つになること、制作過程で葛藤・挫折・失敗などの試行錯誤から自分らしい表現を発見していくことなどが重要である。「できた」という達成感から表現の楽しさを知り、自分の成長を作品の中に確かめることで、自己実現の喜びを感じ取らせることが大切である。そして、自分の中で考えたことや悩み苦しんだことが自分の作品にどう生かされ、どこが足りなかったなどに気づくことは、自分を見つめることにつながり、自己判断力や思考力への橋渡しとなる。創造することの楽しさや喜びの実感、表現の成就感や自信となり次の表現意欲へとつながっていく。発想から鑑賞までの表現の全過程を通して、子どもが生き生きと活動できるための工夫や手だてを大切にしたい。

評価のあり方についても、重要な課題である。教師からの働きかけの全てが、自己評価や他者への気付き（相互評価）を促し、次の造形活動へのヒントや意欲につながるものでありたい。図工美術でこんなことができた、自分の良いところや友達の良いところを感じ取り伝え合うことを目指し、基礎・基本の定着から更に自己教育力への高まりへと向かわせたい。

2. 鑑賞活動と表現活動との関わりをどのように持たせたか

美術教育は、表現活動と鑑賞活動の両立で成り立つものである。美しいものを愛好する気持ちを育むとともに、鑑賞の活動を通じて「見つめ感じ取る力」をしっかりと養わなくてはならない。芸術作品の鑑賞では

ゴッホ、セザンヌ、ピカソがどんな作品を描いたかだけでなく、なぜこのような作品を描いたのかを知ったり、どんな思いや意図が作品に込められているのかを読み取ったり感じ取ったりすることも大切である。そして、感じ取れたことから、「自分ならこう表したい」という思いにつなげることで、次の創作へのステップとなっていくであろう。

子どもの作品の鑑賞のねらいで大切なことは、作品に込めた思いや考えが子ども自身の言葉としても語られ、伝えあう活動となることである。子どもたち一人一人の思いが共感し合える場となるよう、教師が支援・評価していくことが大切である。また、制作途中過程での相互評価や対話の場面は、新しい発見や励まし合いの大切な機会であり、造形のヒントや意欲に結びつく大切な手だてである。子ども同士の働きかけによる相互評価は作品づくりに大きな変化を与える。自分の作品を見つめるとともに、友だちの作品の理解にも積極的に参加できるよう教室の中で安心して意見が言える雰囲気作りも大切にしていきたい。鑑賞活動は子どもたちが集団の中で感受性を育み、豊かな造形活動の土壌となる活動である。人との関わりの中で、美術作品の価値や意味をみんなで作り上げていく、そんな人間環境を整えながら授業に向かいたいものである。

指導案作成にあたっては、鑑賞活動をどんなねらいを持って、どの段階で行い、どのような鑑賞をさせ、表現活動にどう結びつけ生かしていくのかを検討しながら進めていきたい。

表現活動と鑑賞活動が相互に関わり合うことで、自分をより深く理解し、夢を持って生き抜く力を育んでもらいたい。

【石教研図工美術部会 図工美術における基礎基本】

基礎・基本	A	感じ方や考え方	人格として身につけていき、造形活動を通して培われる心	・楽しみ遊ぶ心・自己理解と他者理解・根気や集中力・達成感・豊かな感受性や美意識
	B	表現活動の基本的な力や感覚	表現活動に主体的に関わりために必要な資質や能力	・選び決める力・比べる力・めどや見通しを持つ力・発見し気づく力・見立てる力(イメージを膨らませる力)
	C	造形要素の認識 表現方法	図工美術に必要な基礎事項	・色や形の認識・基礎的な表現技法・材料用具の基礎知識・美術作品の見方

【図工美術で育てたい力と基礎基本事項との関連】

観 点	育てたい力
関心・意欲・態度	楽しむ・追究する・根気や集中力・達成感 など
発想・構想する力	思い浮かべる(イメージする)・アイデア・深めて構築する・選び決める・見通す見立てる・既習の造形体験とつなげる など
表現する力	バランスを取る・比べる・道具を使う・表現の技法・伝える など
鑑賞の力	自己理解・他者理解・価値を感じ取る

研究方法

1. 市町村部会での研究

市町村部会員の協力・共同による研究実践となるよう推進し、二次集会に向けての提言を作成する。

事務局は各市町村部会の主体性を尊重しつつ連携を図る。

(1) 各市町村の部会は全体の研究主題・内容と結びつく研究課題を設定、授業研究や実践交流など検証の場を持ち、市町村部会としての共同研究を進め、二次集会に向けての提言レポートを作成する。

ア. 中心サークルとなった市町村は研究授業づくりを提言に代えるが、別途提言を作成しても良い。

イ. 中心サークル以外の市町村は、独自の研究授業をもとにした提言や、各市町村の研究内容に沿った実践

を持ち寄るなどの工夫をして提言レポートをまとめる。

市町村の提言レポートの提出は推進委員を通し事前に行い、提言集として二次集会に向けて製本をする。

(2) 各市町村の年間計画・独自の課題に沿った研究や事業に取り組む。

(3) 部会員は、日常的な実践の中で研究を進める。

ア．日常の実践研究においては、児童生徒の作品を実践資料として収集・保存しておく。作品は、題材の成果や課題が明らかになるよう、良い作品ばかりでなく、つまずき・驚き・発見・喜び・躊躇・失敗・落胆など、子どもの思考や表現の過程が見えるものや、制作途中のものでも良い。(実践交流の成果が指導に直接生かせる。)

イ．造形活動の過程での子どもの姿がより見えるよう、制作中の様子の写真や授業づくりに活用した資料などもあったら良い。(提言レポートに添付しても可)

ウ．実践レポートを提言と別途で作成する場合は様式を新年度に事務局から提案するが、それにこだわらずに自由な形で作成しても良い。なお、レポートの集約は提言と同様とする。

2．専門部会二次集会

専門部会二次集会での全体会・分科会の持ち方については、部会員の研究への意識・意欲の向上が図られるよう工夫する。

(1) 二次集会では研究授業を設定し、研究課題解明に迫る。研究授業は研究主題に即した一つの提案であることから、担当市町村の部会員のほか役員・推進委員も参加し、事前研究の場を持つことで管内全体の共同研究としてゆく。

(2) 全体会では、研究主題についての共通理解が深まるよう、発表の内容を工夫する。

(3) 分科会では、各市町村の提言・実践レポートをもとに研究主題や仮説をもとに立てた討議の柱に沿った話し合いを深める。提言内容や子どもの発達段階等を考慮して構成する。分科会での意見交流を充実させるためにも、事前に共同研究者・司会者・司会者・運営委員との打ち合わせを持ち、単なる提言発表の場ではなく、論議を深め、研究主題の検証の場となるようにする。

3．理論研修

研究主題に迫るための理論研修会を開催する。研究主題への一面的な迫り方ではなく、幅広い見方や考え方ができるように内容を検討し企画する。

4．実技研修

材料・用具・技法・指導法に対する見識を深め、指導力量の向上を図るとともに、題材について子どもの視点から考えることのできる場として、実技研修を開催する。

(1) 内容については、日常実践に役立つ内容であることを基本とする。

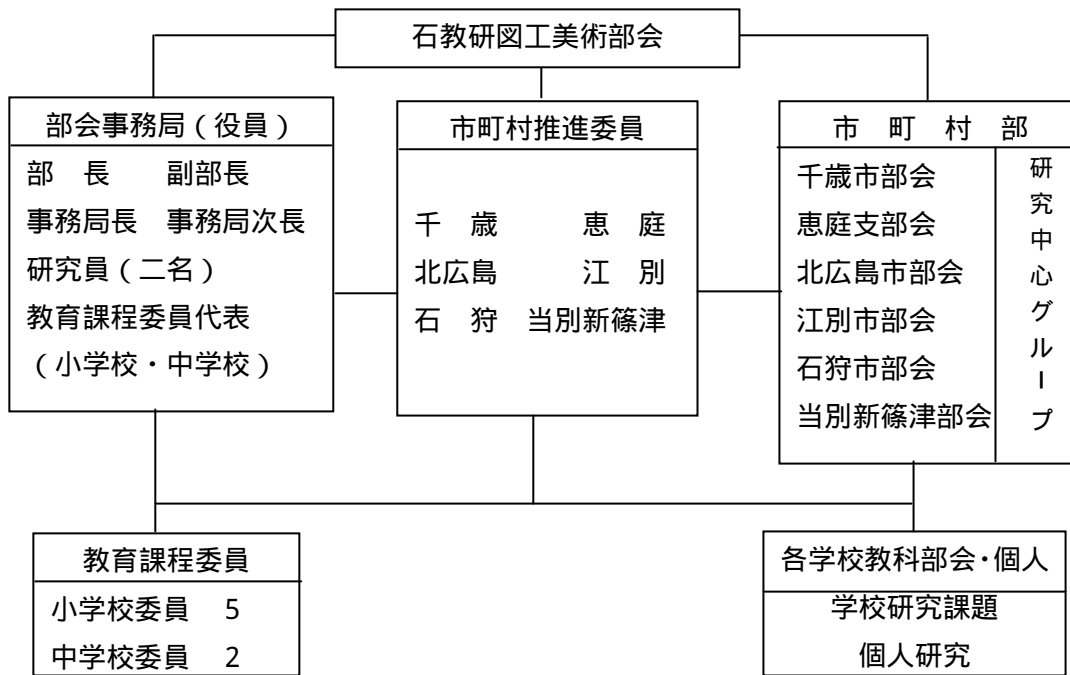
(2) 参加対象者は部会員以外も含め広く呼びかける。

5．研究員だより・部会だよりの発行

(1) 研究員は研究課題解明のための資料・情報を提供したり、研究の意図や課題把握、日々の研究実践に役立てたりできるよう「研究員だより」を随時発行する。

(2) 事務局は研究計画の進行状況や二次集会に向けての情報、各種研修会の案内等を部会員に周知するよう「石教研図工・美術部だより」年数回発行する。

6. 研究体制（組織）



年間計画

月	会 合	内 容	その他
4	石教研専門一次集会 第1回役員・推進委員会	・体制と業務確認 ・研究内容と方法、その他の活動の確認	・各市町村専門部会 一次集会
5	第2回役員・推進委員会	・研究方法の具体化（市町村研究、二次集会、理論・実技研修会等）	
6	理論研修会	・研究課題解明に迫るために、講師による研修会	
7	第3回役員・推進委員会	・二次集会の実施要領検討	
8	実技研修会	・指導方改善と指導力量向上のための研修会	
9	二次集会授業案検討会 第4回役員・推進委員会	・二次集会公開授業研の授業案検討 ・二次集会の運営詳細	・各市町村専門部会 二次集会 ・石教研課題別集会
10	二次集会事後研分科会 打ち合わせ会議 前日会場準備 石教研二次集会	・事後研・分科会運営の打ち合わせ （授業者、共同研究者、司会、記録、運営委員） ・全体会場及び授業会場諸準備	
11	教育課程委員会	・教育課程の作成と改善に向けての取り組み等	
12	第5回役員・推進委員会	・二次集会と本年度の研究の成果と課題のまとめ ・次年度研究構想について ・その他の取り組みについて	
1	「石狩の作品集」 編集作業	・第12集発行に向けての編集作業	
2	第6回役員・推進委員会	・次年度研究計画の提示	・各市町村専門部会 三次集会